

1970年代構造主義の議論から読み解く「もうひとつの建築・インテリア」の地平

－「もうひとつの建築論－建築における構造主義」（建築雑誌 1979.4）を題材として－

To make the theoretical horizon of interior as a parallel architecture through the arguments discussed in STRUCTURALISMS of 1970s

－Through the special feature article “Structuralism as a parallel architecture”

, Journal of AIJ, 1979.4 －

灰山彰好

Haiyama Akiyoshi

要 旨

1970年代、モダニズム建築がますます観念化の度合いを強める一方で、人間らしさを求めて建築の意義を考えなおす機運が生まれ、日本建築学会は会誌「建築雑誌」1979年4月号において、「もうひとつの建築論－建築における構造主義」を特集して世論に応えた。

構造主義に関する万言を建築的に要約すれば、「かたちは機能に従い、意味は構造に従う」と読める。つまりかたちから意味へ、との研究スタンスのシフトが「もうひとつの－」との表現の主意だったはずである。しかし特集に寄せられた論考には、かたちの生成に記号論の援用を企てるものが多かった。一体建築の意味とは何か、ここで思い至るのがインテリアである。というのは、インテリアは建築の意味探究に最も近いところにあるからである。

本報告で筆者は、これら論考の意義と矛盾を指摘しつつ、「もうひとつの建築・インテリア」の理論的地平の構築を試みる。

キーワード：インテリア、建築学、構造主義、記号論、意味

研究の目的

1970年代は環境問題、南北問題、人種民族間闘争、イデオロギー内部闘争等々、それまで順調に推移してきた戦後体制が根本的な揺らぎを見せた時代であった。世界中で近代主義の誤謬を質す大学紛争が吹き荒れ、中でも建築学科は、創作をめぐる個々の思想性が問われる学科であったから、研究者学生の内面的な葛藤は大きかった。建築は適者生存の原則に従って進化するものではなかったのか。過去のトレンドから未来を予測する計画術は駄目なのか。価値基準が180度転回し、未開の地の建築物の素晴らしさを紹介したB. ルドフスキーの「建築家なしの建築」や、抽象的思考に相対する具体の科学の存在を知らせたC. レヴィ・ストロースの「野生の思考」他の著作が彼らの（そして私の）座右書となった。文化人類学の研究で功績を挙げた新しい価値基準は、構造主義 structuralism と呼ばれた。

日本建築学会は工学分野に位置づけられ、大学紛争の影

Summary

In the 1970s, modern architecture was showing a tendency to conceptualize more and more, whereas some architects have had opinions that architecture needs more human touches and so Architectural Institute of Japan put in journal 1979.4 the special section titled “A parallel theory for architecture STRUCTURALISM” in response to those opinions.

Summary of structuralism in architecture is to be “Meaning follows Structure”, therefore the main idea of special section “A parallel-” should have been the study of meanings, but every report in that issue was not concerned with meanings but concerned with forms. Here we realize the matter of interior, because interior is placed most near the meaning of architecture.

In this study firstly the author points out the importance and problems of upper reports, and then tries to make the theoretical horizon for interior as the another architecture.

Keywords: Interior, Architecture, Structuralism, Semiotics, Meaning

響は少なかったが、1979年4月の建築雑誌⁽¹⁾において、黒沢隆によって主集「もうひとつの建築論－建築における構造主義」が編集され、大学紛争がついに足跡を記した。

建築にとって構造主義とは何か。機能主義の理念<かたちは機能に従う>のひそみに倣うと、構造主義の理念とは<意味は構造に従う>というものである。建築においては、意味 meaning は色彩やかたちの持つ機能（心理効果）として受け取られる傾向が以前からあったので、意味は実質的な作用から生まれるものではなく、ただ構造のみから生まれる－との主題設定は実に斬新なものであり、意味生成の論拠を構造主義に置く記号論が、モダニズム建築とは出発点を異にする<もうひとつの建築論>を生む手段として期待されたのである。

しかし黒沢の意図をそこまで付度すると、今度は別の懸念が生まれる。構造主義の視点に立つと決めると、建築家の立場は<かたちの付与者 form giver>から<意味の発

見者>へとシフトしなければならなくなるのであるが、建築家のフォームギバーとしての自負が、はたしてそれを許すだろうか。

この研究において筆者は、主集で引用された記号論の意義と矛盾に対して再度検討を加えつつ、<もうひとつの建築>の一つであるインテリアが論として拠って立つ理論的地平の構築を試みるものである。ところで、構造主義と記号論がなぜインテリア論を惹起するのか、あるいはできるのか。それはインテリアが建築・都市空間の意味を主題にしているか否かはともかく、少なくとも意味内容 contents を課題にしていることは間違いないからである。

1. 予備的考察

黒沢の前書きによれば、編集委員会での議論はそもそも建築論とは何かであったという。近代建築の末期的症状は、取り敢えずはそう訴える建築論の百出として現れ、それら建築論の論拠が構造主義（記号論）であった。筆者も建築学会大会の計画学C室において、何人かの方と記号論に関わる研究発表を行い、意見交換をしていた。司会者は建築雑誌への報告文の中で、建築学のテーマはどこまで拡大するのか、留まることなき拡散を危惧する、との感想を述べておられた。構造的思惟（思考）に一定の展望を得ること—これが主集の意図であった。主集末尾に染谷正弘によって用語グロッサリーが編集されているので、ここに選択された用語目録に従いつつ本報告の目的に沿って再要約し、読解作業の下準備としたい。

<ことば>の体系

構造言語学の祖F. ド・ソシュールは人の精神世界における言語の働きを、言語に先立つ観念はなく、「言語は観念を表現する唯一の記号体系（システム）である」と要約し、<ことばの体系>が構造的思考の唯一無二の起源であると断言した。ところがこの言の—従来の歴史言語学に対する—科学的分析性の高さゆえに、非言語記号にも応用可能ではないかとの想像を惹起し、言語学と同様に歴史学から距離を置くようになっていた建築論を活気づけ、建築することの認識と方法に大きな転換をもたらした。

コードとメッセージ

構造言語学は言語活動を、制度としての言語（ラング）と個々の会話（パロール）とに二分し、両者は不可分の関係にあると言いつつも、このような二分法を当てる場合の通例として、ラングを研究対象と定めている。

建築用語で言うと、これらはコードとメッセージに当たる。巨匠の時代は作品が発するメッセージが建築世論をリードできた時代であり、建築論の時代とは、コード自体が議論の俎上に上がった時代であったといえる。

意味作用 signification

物体が人にある概念を呼び起こす状態を意味作用という—との定義をそのまま読み限り、心理効果との区別がつかない。ソシュールは研究対象を、<ことば>の記号に限定した。物体とは、例えばリンゴという<ことば>を指すのである。概念は言うまでもなく<ことば>である。物体（の名前）は<能記/意味するもの signifying>、概念は<所

期/意味されるもの signified>と呼び分けられたが、本報告ではより平易に、表現（部）expression, E と内容（部）contents, C との用語を当てるものとする。

<ことば>の連鎖

<ことば>は一語で発せられるのではなく、複数語の連鎖で組み立てられる。このとき<ことば>には、語を選択する軸と、選択された語を組み立てる軸との、相互に依存しあう二つの軸が見分けられ、言語学では前者は範列的關係 paradigmatic relation、後者は統合的關係 syntagmatic relation と呼ばれる。統合軸上の構成要素の関係は各々の言語体系の中で約束されたラングであり、統辞論 syntax として独立した研究対象を形成している。建築で言えば例えばゴシック寺院は、建築史上最大最高の統辞論である—との言い方ができる。

統合と範列の二分法を修辞法（レトリック）でいう換喩（メトノミー）と隠喩（メタファー）に対比すると、二分法の意義がより明らかになる。前者は論理的思考に、後者は感性的思考に対応しており、両者もやはり不可分の関係にあるとはいえ、例えば服飾ファッションに代表される今日のマスメディア社会では、範列軸（何を選び何を選ばなかったか）の方に関心が集る傾向がある。

メタ言語とコノテーション

物体は言語の助力なしに記号として機能しないとの構造言語学の原則は、ロラン・バルトの「モードの体系」⁽²⁾において、「ものことばの間（はざま）」とタイトルされた以下の図式によって簡潔に表現されている

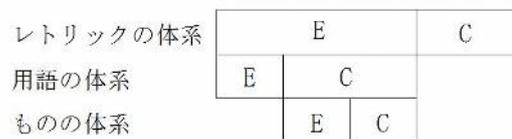


図1 もののことばの間

<ものの体系>とは衣服がただの物である状態を指し、それら例えば<プリント>という専門用語で括られる。モード雑誌は、意外性に富んだレトリック—例えば「レーシングコースではプリントが全盛です」を使って（レーシングコースとはヨーロッパ上流社会の社交場である競馬場を指す）、カジュアルなプリント生地ワンピースから新規の価値観を引き出すのである⁽³⁾。客観的体系性を備える内容部Cを専門用語等で括る表現部Eはメタ（上位）言語 meta language と呼ばれ、表現部Eのみが体系性を備え内容部Cに説明を欠く主観的な表現はコノテーション connotation（ほのめかし）と呼ばれる。ちなみに一組のEとCからなる関係は、デノテーション denotation と呼ばれる。

では建築表現におけるメタ記号とは何か。近代建築家が自分の作品に通底するアイデアを簡潔に言い表そうとして用いる呼び名<コンセプト>が、これに当たるのではない。個々の作品では、あるコンセプトのバリエーション（変異体）が範列軸（レトリックの体系）を形成するが、意味づけを装飾として排除した近代建築家は、コンセプトを裸のまま提示することに腐心した。黒沢が「第二次大戦以前では、近代建築はそれが近代建築であるという唯それだ

けの理由によって、人々に感銘を与えることができた」⁽⁴⁾と指摘するように、前代との対比が、近代建築の唯一無二のレトリックの源泉だったのである。

記号学 semiology と記号論 semiotics

ヨーロッパ起源の記号学とアメリカ起源の記号論の違いについて。フランス文学・記号学者篠田浩一郎は主集論文「美的世界の構造的思惟」において、建築もまた言語活動の一環とする主集編集の意図のもとに、ソシュールバルトに至るく書かれたもの（エクリチュール）を対象とする記号学への系譜を追っているが、その文中で学と論の混同について触れ、＜文化的過程の伝達作用 communication の研究＞を記号論と呼び、＜意味作用 signification に比重を置く研究＞を記号学とする一とのウンベルト・エコの折衷案を紹介している。この場合の総合名称は記号論であり、主集も本報告もその立場をとっている。

2. 建築における構造主義

言語学の土壌で芽生えた構造主義（記号論）を、主集に寄稿した建築家・研究者がどう捉え、どのような応用を図ったか、後章議論のために要点を記す。

近代建築以後（黒沢隆）

黒沢は主集編集の責任者として、近代建築が直面する課題を網羅的に要約してみせる。近代建築は今、発展と維持に必要な未開拓のフロンティア（荒野）を失いつつある。できることは既成コードの破壊であり、破壊の美学が新たなフロンティア（前衛）を形成しつつある（例えば磯崎の＜解体＞）として、以下の事例を挙げる。

まず、建てない建築家を標榜し、情報発信に徹したイギリスの前衛建築家集団アーキグラム。ことばがものに優先する時代の到来を告げた。続いて建築年鑑 68 年版⁽⁵⁾のグラビア特集「IN」（横山正、福田晴度）が取り上げられる。＜IN＞とは、ツルピカファッションを指す当時の流行語である。巻頭論文で宮内康は「遊戯的建築の成立」を書き、近代建築のコード優位性をクラシズムに見立てて、それに相対するバロックズムを称揚している。

以上の二例を前に置いて黒沢は、磯崎新の＜マネエリスム＞を持ち出す。68年、白井晟一の親和銀行本店に対して磯崎は、「凍結した時間のさなかに裸形の観念と向かい合いながら一瞬の選択に全存在を賭けることによって組み立てられた『晟一好』の成立と現代建築のなかでのマネエリスムの発想の意味」（「新建築」68年2月）との長い表題の評論を寄せている。一瞬の選択とは晟一好みの様式混淆を美化した表現であり、範列軸上の対比が生み出す意味作用の効果を、磯崎は独自の表現で支持する。マネエリスムの英語表記はマンネリズムであり、＜過去様式の剽窃はマンネリ時代に許された最後の快楽である＞との宣言である。磯崎は自らの手法（マネエラと呼ぶ）を、＜見ること＞と＜見えるもの＞の間の一認識と知覚の間の日常的な関係を攪乱することと説明している。黒沢は以上の対比は意味作用の＜所記＞と＜能記＞に当たるとし、＜意味作用の操作がデザインである＞とする言質を引き出す。建築におけるコンセプチュアリズム、それは建築物よりも建築論を優

位におく立場の誕生を意味する。

しかし黒沢は、建築の新たなフロンティアとして構造主義に共感を示しつつ、安易に建築論を記号論で読み替えることの危うさについても言及している。

ひとつは、敢えて構造主義を標榜しなくても、過去の諸様式を抽象普遍化して生まれた近代建築には、人為的・恣意的操作法を手中にした上でのコンセプチュアリズムが既にあつたという事実（史実）である。続いて建築におけるラングとパロールについて。黒沢はラングを様式にパロールを表現（作品）に置き換え、建築論は近代建築というラングを無言の前提としてパロールのみ論じてきたと反省する。だから一度、近代建築を客体化―解体―してみなくてはならない、との言い分である。

ところで、パロールの研究からラングへと至る道筋は罗兰・バルトによって拓かれている。「モードの体系」においてバルトは、現実の衣服ではなくモード雑誌の中で書かれた衣服を、さらに語句ひとつひとつではなく語句が複合した＜意味作用の単位＞を分析対象とした。現実の建築を対象にして統辞論を語るのは容易だが、意味単位が論じられたことがあつたらうか―と黒沢は自問自答する。磯崎新が言い続けた修辭的建築は、実は統辞論であつたと後に本人が認めた、とのエピソードを黒沢は紹介している。ものやかたちに堪能な建築家であるからこそ、かえって修辭論は手ごわい研究課題なのであろうか。

多くの疑問に相對しながら、黒沢はいくつかの可能性を挙げて構造言語学モデルに期待を残す。ひとつは、建築を視覚対象として見た場合の、図像学 iconology の応用（福田晴度―後述）である。さらに原広司の空間研究を例に挙げ、建築での構造的思惟は空間モデルによっても可能であるとの主張にも理解を示す。未開の思考に焦点を当てたレヴィ・ストロースの構造人類学も然り、言語学の応用には、ただの直訳でない相応の工夫が必要のようである。

黒沢が描く＜近代建築以後＞の建築的状況は、以上のとおりである。40年を経て再びこの文を読んで思うことは、編集責任者として近代以後の全体像を描写する識見の柔軟さと、それを可能にする「建築」という一語の守備範囲の広さである。以下の論者については、要旨のみ記す。

建築的思惟と生きられる空間（中村雄二郎）

哲学者中村雄二郎は「生きられる空間」を描いて、建築的記号論（引用の誤りが度々指摘されることになる）を牽制している。中村はまず近代主義の分析的、機能主義的思惟とそのリアクションである有機体的、ロマン主義的思惟を対比し、両者―客観と主観の間を橋渡しする第三の問題領域として構造的思惟を規定する。構造的思惟の主たる命題は次の三つである。

一つは＜象徴あるいは言語＞、言語活動は人の中心的活動である。人間活動を総合的に捉える方法に行動科学（後述）があるが、人間を刺激と反応の次元で捉える限界を未だ超えていない―として中村は言語活動の優位性を説く。

続いて環境世界を有意味化する主体は何か、と問う。それは理性でも感覚でもなく、諸感覚の統合体としての＜身体＞そして＜身体的実存＞である。構造主義的思惟は、心

と体の二元論を克服する唯一の方法である。

三つめ、それは人が生きられる場所<空間>である。空間の意味を問うためには、空間の象徴作用(シンボリズム)の探求が欠かせない、として中村は宇宙像をかたどって創られたとされる古代都市ローマの例をあげる。

象徴作用という誇大な事例を思い浮かべるが、われわれ日本人が機能的には不十分な日本住宅を、教養化したシンボリズムで補って暮らしていたのはそれほど昔日のことではない(筆者の研究事例―後述)。中村は活動する身体の間接者と呼ぶ、空間のなに気ない場所、物、高低、仕切りなどの意味―の解明を研究課題として提案している。

美的世界の構造的思惟―記号学展開と空間(篠田浩一郎)

フランス文学研究者・記号学者の篠田浩一郎はこの主集では記号学の専門家として、建築など実用物が美に至る記号化過程を概説している。

記号と言えば象徴(シンボル)が思い浮かぶが、言語記号は差異のみで構成され、表現部Eと内容部Cの間に自然的関係(アナロジー)はない―との定義に照らせば、例えばキリストの象徴である十字架は、キリストとの間には史実があるから記号ではない。しかしアメリカの哲学者パースを筆頭にして拡大解釈が起こり、以下の記号類似物も記号学の対象に入れられるようになった。

指標 雲は雨の指標(しるし)である。すなわち指標は指示対象の起源を示す。

信号 意味内容との関係は単なる約束に基づいて恣意的であるが、内面的な心的表象が欠けている。

図像 対象の形態を再現するもの。十字架上のキリストの聖像は図像(アイコン)である。

象徴 信条やイデオロギーを喚起する慣習的表象。信号と異なり心的表象を伴う。

記号 表現と内容が完全に恣意的な関係(人工的なコードによって結びつけられた関係)にある表現単位。

屋根勾配や柱の太さなどの物性由来の建築表現は、そのままでは記号表現と呼べない。コルビジェ建築を特徴づける<形態言語>は、工場建築から見つけてきた純機能的な建築パーツ(ピロティ、外階段、スロープ、換気塔、日除けなど)を換骨奪胎して公共建築物に用い、ただの機能類似物を超えた心的表象を人々の心に植え付けたから記号なのである。実用的でありながら美的表象を喚起する記号を、バルトは<機能的記号>と呼んでいる。

篠田は記号学のテーマを意味作用 **signification** に置いてこの論考を書いているが、もう一つのテーマである伝達作用 **communication** の研究を標榜する記号論にも触れている。M. マクルーハンが<メディアはメッセージ>と喝破したように、記号表現は伝達過程の力点の置き方に影響を受ける。芸術表現は、便器を美術展に持ち込んだデュシャンの例のように、発信者側の<道具立て>によるところが多い。コルビジェなど建築家の形態言語は、ジャーナリズムを利用した道具立てのうまさ抜きには説明できない。

最後に篠田は、バルトのテキスト理論に触れる。バルト

が分析資料にした<書かれたもの>は、実はその時初めて書かれたものというより、先行する文とコードが複雑に織り上げられた織物・テキストである―として、バルトのその後の研究主題はテキスト分析に移った。文化的所産はすべて先行するものの部分的引用にすぎないとすると、作者は創造者と言えなくなり、書くことよりも読解の方が重要になる。黒沢が近代以後を要約して述べた「建築物よりも建築論を優位におく」とは、建築もテキスト分析の対象となり得る―との言表であろうか。

篠田の論考には、記号学と記号論の使い分け事情も含まれているが、この項の要約は前章予備的考察の末尾に記したとおりである。

建築解釈と建築設計―ラファエロのグロテスコを例にして(福田晴虎)

ソシュールが言語の統合関係を古典建築のオーダーに例えたように、建築と言語は似ているが、しかし似ている点のみで構想する建築記号論に、福田は懐疑的である。

グロテスコの起源は古代洞窟で発見された幻想的な彩色文様であり、イタリアルネッサンスでは、古代風の雰囲気を出すフレスコ壁画としてジャンルを形成した。円柱列が初期的な透視画法で描かれ、その隙間を埋めて奇妙な事物が描かれる。グロテスコは壁画であるから、絵画史のテーマとして(寓意解明の題材として)扱われてきたが、福田はその建築的機能に焦点を当て、グロテスコ自体は美しくも立派でもなく、建物の尊厳を高めるのに何ら貢献していないのでは―との謎にたどりつく。ラファエロのグロテスコは、弟子たちの手によって、彼の世俗的建築作品の壁画を埋め尽くしているという。

透視画法はグロテスコの一要素に過ぎないので、全体としては寓意表出を無視することはできない。そこで福田は、グロテスコは建築本来の表出とは無関係の闖入者であって、ラファエロの創作姿勢にヴェンチュリーに似た逆説的ポーズ―もはや建築本来の表出には期待できないとのポーズ―との類似を指摘して、論考を閉じる。つまり福田は、逆説的ながら<伝達の記号論>を支持しているわけである。

アカデミックな立場から―建築の両義性を思惟する(渡部貞清)

バロック建築の研究者・渡部貞清は、<学としての建築論>と<建築家の建築論>の両義性の超克を、学としての建築論に義務付ける。というのは、構造主義的思考は言語学のみならず、単純な計量主義を脱して現象の本質を見通そうとする今日の物理学、生物学、ゲシュタルト心理学等々あらゆる分野に共通するテーマであって、建築学も例外ではないはずだからである。

建築学者と建築家の発想の違いを、渡部はS.K.ランガーの芸術記号論を引用して説明している。芸術における両義的性格をランガーは **art symbol** と **symbol in art** とに区別し、それぞれが起こった経緯を追って両者の和解を図る。**symbol in art** とは芸術構成要素の意味 **meaning** を開示する構造原理であり、一方 **art symbol** は、芸術自体の意味 **import** を創造する実践者のための構造原理である。

渡部は表層と深層、解釈と記述、全体と要素など両義性

の相克はどの分野にも存在するとし、存在自体の意味を問う存在論的思惟の必要性を訴える。

なお、次に取り上げる建築家の発言集「わたしの方法」は、渡部の論考と関連がある。したがって主集では、この論考は「わたしの方法」の後に掲載されている。

3. わたしの方法

独自の建築論で知られた以下の諸氏が、主集編集のために方法論を開陳している。

二つの軸（多木浩二）

芸術学・哲学者多木浩二は、記号論から新しい建築手法が導かれるのでは一との期待的論調（主集編集の意図でもある）に対して、まず強い警鐘を鳴らす。というのは、記号論が敷衍される建築に伏せられた文脈の読解は、ひとまずは作者ではなく読者の問題であるからである。

ふたつの軸とは、送信と受信の対比から成る水平軸（伝達 communication の記号論）と、建築の文化的機能の深層理解へと向かう垂直軸（意味作用 signification の記号論）であり、建築論的アプローチとは、この二つの次元と相互の変換を建築の中に読みとることと規定する。

記号論は読解のための論であって、安易に創作論に変わるべきではない。

異化のレトリックヘテロロジー⁽⁶⁾について（竹山実）

建築の意味の進化を記号作用で説明すると、アナロジー（類似）からホモロジー（相同）への進化、と読める。例えば、樹木の力強さを真似た原始の住まいがアナロジーであり、構造力学が理解された後に建てられた木造住宅の力強さは、樹木のホモロジーである。以上誰でも納得する前提の後で、竹山は建築の次の進化過程としてヘテロ・ロジー（異・化）を想定する。ヘテロというと筆者はラジオの回路技術<ヘテロダイナ>を連想する。受信波を受信機内部で発生させた異なる周波数と混合して強調された受信波を得る技術であり、ヘテロ（異なること）をダイナ（力）に変える発想は竹山の主張と同じである。

異質な物をぶつけて建築のシンタグム（統合的関連）を歪曲し、メタファーの多様化を図り、結果として生まれるパラディグマティックな記号体系を期待する一まさに発信者側の論理である。

構造と空間（原広司）

建築家・原は主集編集の意図に反して、言語モデルによらない構造モデルについて論じている。当時原は集落分布に力学的法則性を見出す研究に取り組んでおり、論考ではその過程で得た知見を披歴しているが、これらは後にアクティビティーコンター（活動等高線）理論として結実した。

原の等高線表示法の数学的根拠は難解であるが、内実は計量地理学という重力モデル（構成要素間の引力と斥力が集落のかたちを決める）の図形化ではなかったかと思う。集落研究といえば地相学、原始信仰、慣習等認識の力（記号論のテーマになりうる）に期待しがちであるが、建築はもっと力学を尊重すべき一との主張である。

建築の新しい文体に向けて（藤井博巳）

建築家藤井はマンフレド・タフーリの発言を引いてクラ

ングの建築>対<パロールの建築>との二分法を持ち出す。ラングの建築とは、空間の構造や仕組みに重点を置いた建築であり、一方パロールの建築とは、コミュニケーションに重点を置いた建築を指す。このような対比を持ち出す訳は、藤井自身の建築術は何か発信したいメッセージがあるというよりは、むしろそれらをすべて消し去って空間の仕組み（ラング）に戻りたい一との欲求の実践であったからである。<意味の消去><意味の負性化>と名付けた方法に対して、極度な様式化によって概念の明快さに到達した能や歌舞伎の手法を比喻する。とりわけ歌舞伎の<宙吊り>は、現実と超現実の両義性を文字通り宙吊りにしながら、それを空間の仕組みとして露わにする、という意味で示唆的である。

<負性化><宙吊り>は、建築における新しい文体の模索である。

4. もうひとつの建築・インテリア

以上の議論を敷衍して、インテリアを<もうひとつの建築>に見立てることの妥当性について検討する。ここで「論」を省いた訳は、インテリアを観念論の対象としてはなく、具体的実証的に論じようとしているからである。

<インテリア>という分野の在りか

諸氏の発言中インテリアは一度も取り上げられていないが、都市も同様に触れられていないので、不当とは言えない。というのは、諸氏は<建築>をすべての環境設計の総称として使っており、室内設計という意味でのインテリアは、当然その中に含まれるからである。建築家・研究者は職能的に構造概念に明るく、言語の統合関係の説明に古典建築のオーダーが使われたように、言語と建築の形態言語には類似性があったから、構造主義と記号論を手中にするのは、誤解も生じやすいとはいえ（福田）、容易であった。またデザイナーには心理主義に元々抵抗感があるから、表現と内容はコードによって結ばれるとの定義は、むしろ我が意を得た感すらあったのではないか。さらに、分析の具体性ゆえに多くの論者がバルトの記号学を引用しているが、しかし建築表現によって指示されるはずの意味内容 contents について諸氏は言及していない。この、建築の<内側（室内の意ではない）>と言えるエリアこそ、インテリアと呼ぶにふさわしい分野の在りかではないか。

<建築の内側>の存在に確信を得ようとする中、中村雄二郎の「生きられる空間」についての論考が心強い。中村は「生きられる空間」の探求で取り上げるべき対象として<象徴/言語><身体><空間>の三つを挙げ、<身体>を前に置くことで<空間>がただの視覚対象に戻ってしまう危険を防いでいる。「空間のなに気ない場所、物、高低、仕切りなどの意味の解明」とは、まさにインテリア学の原論を示唆しているように見える。

なお中村は<もうひとつの建築論>の有力候補である行動科学については、刺激反応系の研究を出ていないとして批判的である。行動科学の書の方にも、用語解説に終始して具体性を欠く記号論への批判（A.ラポポート）が見られるから、後の章で取り上げてみたい。

＜意味作用の建築＞としてのインテリア

＜伝達の記号論＞と＜意味作用の記号論＞を対比する論調が、主集では数多く見られた。篠田は記号学者の立場から主集のテーマを捉え、意味作用の解明に力点を置き、書くよりも読解に力を注ぐべきであるとして、建築家の記号論指向（伝達の一端的に言えば発信者側の記号論）を牽制している。一方ラッファエロを引用する福田の議論は、意味作用の検証よりも建築的状況が惹起するレトリックの方を優先する、建築家のフォームギバーとしての義務感の擁護であり、竹山、藤井、そして黒沢が引用する篠崎の発言（篠崎から投稿が無かったとのことである）もその範疇に入る。建築学者である多木の＜ふたつの軸＞と同じく渡部の＜両義性＞は、二つの建築記号論の和解案である。

つまり主集では、記号論の可能性の半分しか議論していないことになるが、しかし残りの半分の＜室内＞とすると、今度は対象が矮小化される懸念が生まれる。筆者がインテリアと呼ぼうとしているエリアは、建築が好むメタ（上位）言語・レトリックの体系に対しては下位言語であるが（図1参照）、対象を室内に限定する理由にはならない。通りや街並みを対象とする＜都市空間の内側・都市のインテリア＞を構想すれば矮小化は回避される。

＜建築都市空間のテキスト・インテリア＞

「先行する文とコードが複雑に織り上げられた織物」とのテキストの定義に照らすと、長く住みこまれた住空間や歴史が幾層にも折重なった伝統街並みは、読解の楽しみを与えてくれるテキストである。藤井の＜意味の負性化＞への願望は、陳腐な意味づけを嫌う建築家に共通するが、一方、近代的なビルの中に組み込まれた伝統割烹や民俗趣味の居酒屋に気持ち良く騙されたいとの願いも万人に共通する。そこで結局は＜見せ方の問題＞であるとして、再び伝達の記号論へと議論が循環する。だから篠田他の記号論研究者が、意味作用の記号論は創作ではなく読解のための理論であると念を押したのである。建築・都市空間の下位言語であるインテリアは、本報告においてはひとまず読解の理論であることを明記しておきたい。

5. インテリア記号論の試み

主集編集当時、筆者は都市近郊新興住宅地に建つ独立住宅を対象に、クライアントの住まいに対する＜思い＞を解明する研究を始めていた。当時のメーカー住宅はプレハブと呼ばれて住宅ファッションをリードするに至らず、注文住宅を希望するクライアントは建築士を介して工務店に建設を依頼し、筆者にも設計例があった。大学教育の独立住宅は公私型と決まっていたが、実務で知った注文住宅は、色とりどりの外見に反して、内実は和洋折衷の旧態を引きずってひどく典型的であり、筆者の父親世代に当るクライアントは何をを考えておられるのかとの疑問が研究の動機となった。研究が進展すると面白くなったが、当初はソーシャル・バルト記号論に惹かれての、研究のための研究であった。工学部のルールに従って実証に徹したので、完成には思いのほか時間がかかり、20年後に移籍した大学において、出版助成を得て公刊できた⁽⁷⁾。ここでは要点のみ

記し、先に主張した＜建築の内側＞の論拠としたい。

＜室名＞というテキスト

住まいの実態調査というプライバシーの侵害が懸念されるが、筆者の調査（1980）は用途（表1）を提示してそれらが行われる室、空間の呼び名を問うものであり、高い回答率（148戸65%）が得られた。室名は最小限度の表現行為であって、前向きの回答が得られる分、情報としてのあいまいさも残るが、筆者はそれらを含めて研究資料とした。なお、室名（呼び名）を住まいの調査資料とするアイデアは、若き西山卯三の研究⁽⁸⁾から得たものである。

実用的用途						
a	b	c	d	e	f	g
食事	団らん	調理	洗たく	その他の家事	洗面脱衣	化粧更衣
剩余的用途						
h	i	j	k	l	m	
年中行事	人生儀礼	接客	趣味	鑑賞	仕事	

表1 提示した用途の名称

機能体としての住空間

得られた室名と用途と相関関係を相関距離（0～1）で表現してクラスター分析を実施すると、機能的に類似した室名群がグルーピングされ（図2、相関距離閾値0.3）、これに[L][DK]などの空間表記を当てると、大学で教える住宅プランニングと一般クライアントの間取りの違いが明らかになる。[L][DK]等の表記は、バルトの意味作用の図式（図1）における＜用語の体系＞の表現部E（空間コンセプトと呼んだ）に位置づけられ、その内容部Cは＜もの体系＞を含む、住機能の計量的説明となる。

クラスター分析の結果（図2）を一瞥して気付くことは、リビング空間[L]（と名付ける）に含まれる室名の多様さである。リビング空間[L]はイコール居間ではなかった。座敷、和室は予想の内にあつたが、玄関と庭は想像外の発見であった。クライアントは狭い[DK]に家族を押し込め、自分の個室を犠牲にして（後述）、客の＜おもてなし＞を優先していたわけである。以後、呼び分けの動機（範列軸）の検討は、多様な室名バリエーションを有する[L]空間のみにおいて行った。

【L】空間の特徴変量と意味平面

共用室の機能は用途の出現頻度の高さで表されるが、共用室の呼び分けの動機は、むしろ出現頻度が低い稀な用途による特徴変量（1,0）によって表される。[L]室の特徴変量を、各室の用途分布を示す原データに数量化理論Ⅲ類を適用して求めると、表2の分布表が得られた。[L]室相互の違いを識別するものは、＜bだんらん＞以外はすべて剩余的用途であり、クライアントが最後に住まいに望むのは、機能を超えた何らかの＜価値＞であることが分かる。続いて表2の特徴変量リストに再び数量化理論Ⅲ類を適用すると、[L]諸室の違いを説明する分類尺度が得られ、これを第2軸まで使って意味平面として表現すると図3となる。平面上にプロットされた室名と用途から推量すると、

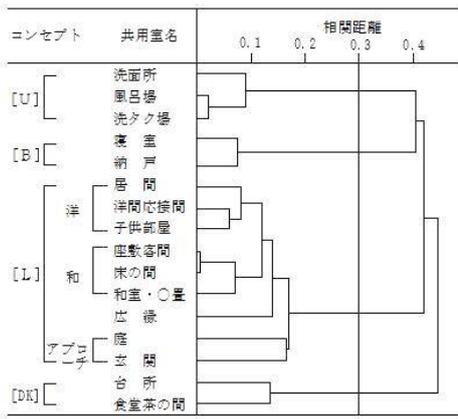


図2 共用空間のクラスター分析

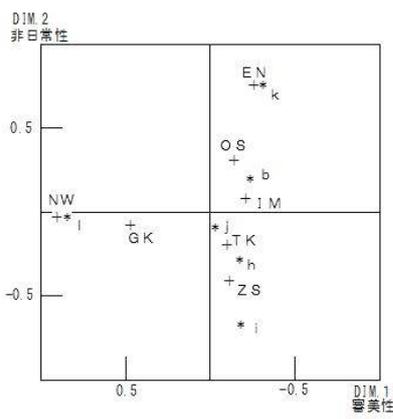


図3 リビング空間 [L] の意味平面

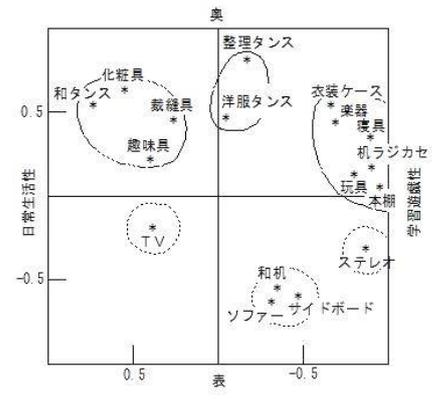


図4 個人空間の意味平面

第1軸は玄関や庭を他から区別する<審美性>、第2軸は座敷和室と縁側を区別する<非日常性>と読める。以上の2軸は、価値をコノート(暗示)する範列軸の役割をはたしている。

玄関に華を活け、友と庭で歓談する。年に何度かのハレの日に備えて、座敷を空けておく。世間体と言えはそれまでであるが、郊外のクライアントは住機能への関心はほどほど、むしろ生活表現者であろうとしたわけである。

共用室名	b だ らん	h 年 中 行 事	i 人 生 儀 礼	j 接 客	k 趣 味	l 鑑 賞
居間 IM	1	1	0	1	1	0
応接間 OM	0	0	0	1	1	0
座敷 ZS	0	1	1	1	0	0
床の間 TK	0	1	0	1	0	0
広縁 EN	0	0	0	0	1	0
玄関 GK	0	0	0	1	0	0
庭 NW	0	0	0	0	0	1

表2 [L] 空間の特徴変量

個人空間の意味平面

住宅作品の撮影に家具や卓上の道具の配置が欠かせないように、それらの意味作用には疑いがない。家具道具は持ち主の生活スタイルをコノート(暗示)する。大広間に雑居した旧い日本の住まいでは、個人空間の識別は持ち物で行われていた一との民俗学の知見を参考に、家具道具の所有(共有)関係による家族テリトリーの形成状況を調べた。というのは、和風の住慣習が残る標本住宅では、障壁の主流はふすまであり、家族が互いにプライバシーを譲歩しつつ生活している様子が見て取れたからである。

家具の所有関係を示すデータに、主成分分析を適用して家具道具の分類尺度を求めると、図4に示す意味平面図が得られた。家具の分布から推察すると、第1軸は<学習遊戯性/日常生活性>、第2軸は<表/奥>と読める。寝具(ベッド)、ラジカセを囲む家具道具は、学齢期にある子供のテリトリー(個室が与えられている)を指し示す。母親も家事室兼用とはいえ、嫁入り道具で固めたテリトリーを確保している。ソファ他は共用空間リビングルームの所

在を示す。微妙な位置にあるTVは、同居祖母(祖父の同居例なし)が終日番をしている。高価なステレオは父親と男児の共有物なので、リビングルームに置かれている。ところで父親のテリトリーはどこか。当時企業戦士の父親にはテリトリーは不要、たまの休日はソファ上で過ごし、FMやレコードを聴いた。整理タンス、洋服タンスは納戸など無人の中立場所に置かれるので、この位置にある。

さて、家具道具はどの種の記号か。もし<主婦の座>に形があれば象徴であるが、図4を導き出した手順の性格上、当時の住宅傾向を示す<標識>に留まると考えられる。

6. 考察

主集で交わされた議論によって、建築家の記号論への関心が<見せ方のレトリック>であったこと、<生きられる空間>を形成する下位言語(=インテリア)の意味作用については、なお空白のままであることが分かり、そこに筆者の郊外住宅を対象にした研究を充当してみた。主集で繰り返された議論と筆者の試みを合わせて以下の論点に要約し、<もうひとつの建築>としてインテリアが果たすべき役割と可能性について展望する。

現代建築の課題とインテリア

主集では近代建築の危機が叫ばれて<負>の側面が強調されたが、コルビジエをはじめとする巨匠建築家はいずれも住宅設計で新理論を着想し、戦災復興を機会に得たビッグプロジェクトに適用して成功したのであるから、その活躍は称賛し過ぎることはない。事実、後に黒沢は「近代建築を導いた住宅設計」⁽⁹⁾と題する著作を著している。

住宅建築家が成功した理由は<スケール感を身につけていたから>と評されることが多いが、以上の検証の後では<建築の内側・インテリアに通じていた>と補筆したい。近代住宅を導いたとする名作の多くがワンルーム住宅であり、筆者が研究対象に取り上げた郊外戸建て住宅も、明快な表現を持たないとはいえ、内実は日本住宅の習慣を引き継いだワンルーム住宅であった。ワンルーム住宅は住み手の住宅教養が空間秩序を補完してはじめて本来の住み心地が実現する<記号空間>であり、この原理をビッグプロジェクトに応用すると、ユーザーの参加をうながす建築が生

まれる。だから近代建築の危機とは<初心が忘れられつつある危機>とすべきであるが、内実は戦災復興需要が終焉する危機感も交錯していたのではないか。建築家諸氏の発言には、伝達の記号論を駆使して建て替え需要を喚起する意図も見え隠れしている。

近代建築の危機を以上のように要約すると、現代建築の課題は<かたちのない建物、意味内容 contents が主導する空間設計>となる。日本の各地に陸続と出現する巨大なショッピングモールが、ひとまずそれに当たる。

建築とインテリアの<棲み分け>

筆者は以前より<建築概念の外延(情報)を追求する建築>と<その内包(意味)を追求するインテリア>との役割分担を提案してきたが、この度の検証によって、<伝達の記号論を標榜する建築>と<意味作用の記号論を標榜するインテリア>との分類が加わった。<書く建築><読むインテリア>との卓見も、この度の検証で得た収穫である。もちろんこれらはそれぞれ別の人間の役割と考えてもよいが、普通は同じ人間の中で起こる葛藤である。

構造主義イコール記号論を前提として編集された主集であったが、寄せられた議論には異論も多かったし、さらに行動科学など外部からの批判もある。だから記号論はとりあえず棚上げしてよいのではないか。人が住む空間の意味の探究が主題であることが確認できれば、<インテリア>は取り組みやすい課題設定ではないかと思う。

計量主義批判

渡部が触れた<単純な計量主義を捨てて現象の本質を見通す研究トレンド>については、筆者も考えるところがあった。例えば国の住宅統計(数値変数)は、計画中の住宅の位置づけを知る貴重な情報であるけれども、それはあくまで情報の外枠にすぎない。住宅情報の内部に分け入る方法はないか。そこで郊外戸建て住宅の研究において筆者は、様々なスペースの<意味内容>をよりリアルに表現し比較できるデータとして特徴変数(表1)を選んだ。辞書を引くときに経験するように、ことばの意味とは様々な類義語で言い換えてみたときに生まれる類似部分のイメージであり、一方、差異部分はことばの情報(他の語との明確な違い)を質問者に与える。特徴変数の出現頻度の多数例がスペースの機能をかたちづくり、少数例がクライアントの価値観(こだわり)を表現する。人の住まいの本質が垣間見た一と筆者には思えた。

もうひとつの建築論<都市のインテリア>

大学紛争を契機にして都市計画(街づくり)への市民参加がうたわれ、C.アレクザンダーはユーザー参加型の計画書「パタン・ランゲージ」を発表した。パタン・ランゲージとは253編からなる、「公」と「私」の良き協同を訴えるバイブル仕立ての警句集である。筆者はこの目次に手を加え、<都市のインテリア>のガイドブックとする内容索引を、当学会の研究報告集に発表している⁽¹⁰⁾。

<もうひとつの建築>の有力な勢力に、先に触れた行動科学がある。中村の刺激反応系の域を出ないとの批判は、実証的であろうとした研究スタイルが生んだ誤解である。A.ラポポートは邦訳書「構築環境の意味を読む」⁽¹¹⁾の中

で、建築記号論は不必要に難解な用語定義に終始して、何をしたいのかよく分からない一との主旨の批判をしている。本書の監訳者高橋鷹志は著書「環境行動のデータファイル」⁽¹²⁾において、10㎡規模の空間デザイン集を具体的データと共に提案しており、行動科学の意図がよく分る。筆者にとって本書は、建築の下位言語に当たる意味内容部の事例集である。記号分類でいえばこれらは<標識>に当たるが、記号表現として機能するか否かは、応用するデザイナーの見立て次第である。

結び

「書き急ぐより読解を」との主張を、記号論を引用して繰り返してきたが、究極の目的はやはり「これからのインテリア」の提案でなくてはならない。住宅で、都市で、今起きている困難は何か、各位と共に取り組んでみたい。

注記

1. 「建築雑誌」日本建築学会 1979.4, pp.36-62。学術(ペダント)における建築論と建築家の建築論との間の質的隔たりを、構造主義・構造的思考の普遍性があるいは埋めることができるのでは一との期待が、主集編集には込められている。
2. 「モードの体系」ロラン・バルト(佐藤信夫訳),みすず書房 1972。訳者あとがきによれば、本書は構造主義の発想による最初の応用記号学とある。資料がポピュラーなモード雑誌であるので、読者は自分の体験をトレースできる。
3. 「モードの体系/第三章物と言葉の間」pp.46-64
4. 「建築雑誌」p.38, 主集の前書きで述べられた黒沢による問題提起の中核。この指摘の仕方自体が構造主義的である。
5. 「IN」横山正・福田晴彦, 建築年鑑 1968
6. 原文では「ヘトロジー」と記されているが、ここで一般的な異化理論の呼称<ヘテロジー>を当てた。
7. 「インテリア記号論」灰山彰好, 溪水社 1996
8. 「室名呼称より見たる住空間の機能分化」西山卯三, 建築学会大会論文 30号 1943(西山卯三著作集1収録)
9. 「近代=時代のなかの住居-近代建築をもたらした46件の住宅」黒沢隆, 角川MF 1993
10. 「C.アレクザンダー『パタン・ランゲージ』に描かれた都市のインテリア」灰山彰好, JASIS21, 2011
11. 「構築空間の意味を読む」A.ラポポート(高橋鷹志監訳, 花里俊廣訳)彰国社 2006, 第二章意味の研究/記号論的アプローチ参照。第二章は象徴論的アプローチ, 非言語コミュニケーションからのアプローチと続いており, それらは広い意味で記号論である。だからラポポートは記号論を狭義に捉えて用語定義に終始していると非難しているようにも見える。
12. 「環境行動のデータファイル」高橋鷹志+チームEBS, 彰国社 2003